



▲写真 2: 2 つ目のため池



▲写真 3: ニッポンバラタナゴ
の産卵母貝であるタガイ



▲写真 4: たくさんのニッポンバラタナゴ

のニッポンバラタナゴが目に入ったときは、本当に感動しました（写真 4）。今やもう滅多に見られない魚です。「よくぞここで、（混じることなく）命をつないでいた！」研究会の皆さんが、個体数や水質を計測されている横で、私と長男は観察ケースに入れたニッポンバラタナゴに目が釘付けになっていました。普段よく見る外来種のタイリクバラタナゴとは明らかに違います。全長は 4、5cm 程度でより小さく、雄は体を「桃色」の婚姻色に染め、非常に美しく可憐な姿でした（写真 5）。二枚貝に卵を産み付けるための産卵管を長く伸ばしたメスも数多く確認できました（写真 6）。明らかに純系とされるニッポンバラタナゴを直接この手で触り、こんな近くで観たのははじめてだったので、テンションは上がりっぱなしでしたが、両池ともカワバタモロコは 1 匹も確認できませんでした。



▲写真 5: ニッポンバラタナゴのオス



▲写真 6: ニッポンバラタナゴのメス

カワバタモロコがたくさん捕れた池は、水草、抽水植物、藻類などの植生がとても豊かな池でした（写真 7）。繁殖や生息にはこれらが大きく影響していそうです。オスは婚姻色が強く出ていて、体は見事な黄金色に輝いていました（写真 8）。メスは地味な体色ですが、オスよりも二回りほど大きく、卵をもっているためか、ずいぶん丸い体形でした（写真 9）。素晴らしい体色と、立派な体つき、これらはため池の環境がかなり良いことの証だと思います。帰り際、この池には他の池で捕まえたニッポンバラタナゴを移し入れました（写真 10）。研究会は、異なる環境のため池に個体が分散するよう、適宜移植されているようでした。



▲写真 7: 3 つ目のため池



▲写真 8: カワバタモロコのオス



▲写真 9: カワバタモロコのメス